

新発見の連続 ～夜に渡る鳥のカウント～

応募者 原 星一

【はじめに】

タカ類やヒヨドリ、ミヤマガラスなど様々な鳥が日中に渡る一方で、夜間にも多くの鳥が渡っている。GPSなどの追跡装置やレーダーなどのハイテク機器でそれを確認でき、ツグミ類やシギ、チドリ類、ガン・ハクチョウ類などのフライトコールが夜空から降ってくることで、その現象を身近に感じられる。しかし、実際にそれを直接目で見ることは難しく、これまで目視による観察はほとんどされていなかった。私は2018年秋に、**外灯の光に照らされる渡り鳥を直接観察できる場所を発見**した。その後、試行錯誤を経て、2021年からは8月末～11月上旬の約70日間の連続調査を実施している。たった一晩で6000羽以上がカウントされた日もあり、夜に渡る鳥の多さに圧倒された。まだ誰も見てこなかった世界なだけに、日々新発見が続いている。

【調査地、方法】

青森県龍飛崎付近にて、北海道方向から南下してきた渡り鳥を1～数名で目視、あるいは撮影した個体をカメラのモニターで識別しカウントする。レーザー距離計で計測可能だった鳥の最高高度は約120メートルで、実際はそれよりやや高いところを渡る鳥も見えている。様々な撮影機器や設定方法を試し、**うす暗い中でもオートフォーカスによる撮影が可能となり、ムシクイやセンニュウ、ヒタキなど識別が難しい鳥でも種まで判別可能だ。**



センダイムシクイは下雨覆や下尾筒が黄色く、下嘴が先までピンクという特徴がある。エゾムシクイは下嘴先端が黒く、下面に黄色味はない。

【期待される成果と展望】

① 月齢と渡り鳥の通過数の関係

これまでの調査では、西寄りの風が適度に吹く夜に渡り鳥が多い傾向があるが、もう一つ大きな要因に月齢が関与している可能性が浮上している。今のところ、満月近辺の空が明るい晴天時には通過数が少なく、新月近辺の暗い夜に多い。しかし満月、新月の時期は毎年大きく異なるため、この関係を知るには、複数年調査を続ける必要がある。満月時に月をビデオ撮影すると、高空を渡る鳥が月の手前を通過するのが確認できるため、月が明るいときは高度を上げている可能性がある。**月齢と飛翔高度の関係を解明し、夜間の風車へのバードストライク軽減を目指す。**



月の手前高空を通過した
モズと思われるシルエット(10/12)

② データの蓄積

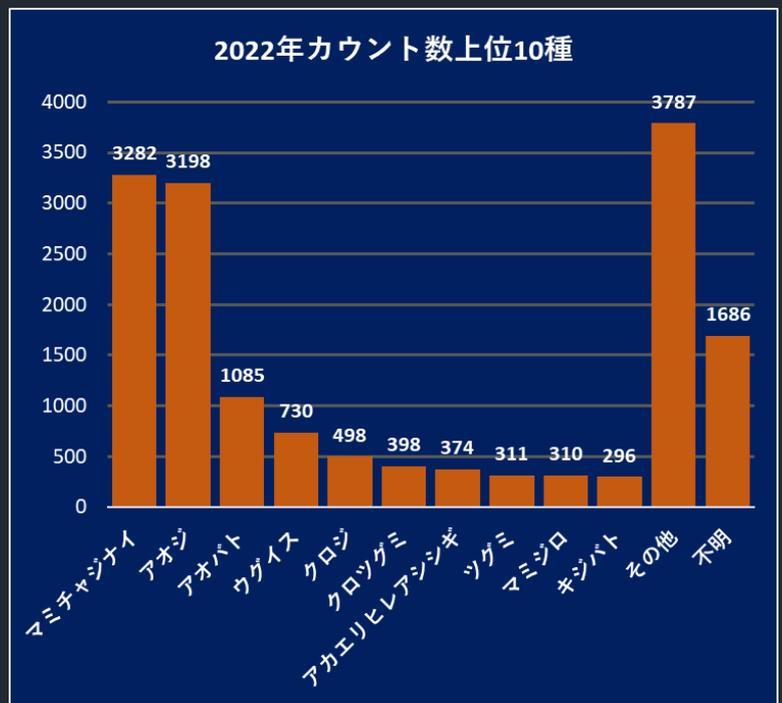
夜に渡る鳥を種まで特定してのカウント調査は前例がほぼなく、タカの渡りなどのように**基礎的なデータが存在しない**。これまでの調査を通じてどんな鳥が、いつ、どれくらい渡っているのかある程度分かってきたが、今後その時期や種構成が変化する可能性もある。例えば、アカゲラは2019、20年にはコンスタントに観察されたが、2021、22年には1羽も確認できておらず、鳥によっては年変動が大きい可能性も浮上した。**将来に、今を振り返るために必要なデータを蓄積していく**ことが一つの目的である。

③ 渡り鳥の新たな調査手法の確立

この調査方法は、夜に渡る鳥の**種が判別できる**ことが**画期的**であり、これまでも様々な新事実が発覚している。日中の目視によるカウント調査や鳥類標識調査(バンディング)などに加え、**渡り鳥の新たなモニタリング手法として期待**できる。青森県で始まった本調査をきっかけに、最近では当地以外でも調査可能な場所が見つかり始め、撮影や識別方法の普及が進んでいる。近い将来、新しい調査方法として確立できれば、渡りのついでに理解をさらに深められる。

【2022年速報】

2022年の調査は本研究支援を受けて実施した。8/24～11/8の間に**約80種16000羽**がカウントされ、マミチャジナイ、アオジ、アオバトの上位3種が約半分を占めた。アカショウビン、マキノセンニュウ、ユリカモメなど新たな種も確認された。また、**現地に生息するハヤブサ**や、**渡ってきたコミミズク**によるハンティングも**頻繁に確認**され、捕食者にも注目している。



ジュウイチを捕らえた
ハヤブサ(8/28)

助成金の使用用途

ハンディーライトなどの照明器具や撮影機材、バッテリーなどの消耗品の購入、宿泊などの現地滞在費、交通費に充てる予定です。ご支援よろしくお願いたします



今季初めて観察された
アカショウビンの渡り(8/28)